



TITLE:

ニホンザル志賀B_2群の遊動生活 (Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

好広, 真一

CITATION:

好広, 真一. ニホンザル志賀B_2群の遊動生活(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1975, 4: 31-32

ISSUE DATE:

1975-01-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162596>

RIGHT:

申請4件(4名) 採択3件(3名)
5. 行動の発現機序に関する神経生理学的研究

申請5件(7名) 採択5件(7名)

6. 霊長類の生殖に関する基礎的研究

申請4件(9名) 採択4件(9名)

B. 自由課題

申請17件(20名) 採択14件(17名)

研究会課題に関しては、公募に際し特に設定主題は提示されなかった。運営委員会の議を経て5件が採択されたが、年度途中で予算の追加があったために、さらに5件が追加採択された。なお後者のうち二件は研究所主催シンポジウムとして企画されたものである。これらの研究会及びシンポジウムのテーマを列記すればつぎのとおりである。

[シンポジウム]

1. 繁殖とポピュレーション

2. 霊長類の「脳と行動」

[共同利用研究会]

1. ニホンザルの現況

2. 主としてニホンザルを対象とした行動の研究

3. 霊長類の温度適応

4. ニホンザル地域個体群の研究

5. 霊長類研究における生化学的アプローチ

6. 系統

7. ロコモーションに関するワーキング・グループ

これらの共同研究課題、シンポジウムおよび研究会に使用された費用は研究員等旅費671.7万円、校費385.5万円であった。円滑な共同利用研究活動の発展のためには大巾な増額が望まれる。(久保田競)

2. 研究成果

設定課題 1. ニホンザル地域個体群の研究

ニホンザル野生群の糞分析¹⁾

前田 憲彦(東京農工大・一般教育)

ニホンザル野生群の遊動時における群内構造についての研究¹⁾

岩野 泰三(東大・理)

ニホンザルの遊動域要因としての植生¹⁾

高杉 欣一(東大・農)

房総丘陵のニホンザル野生群の遊動とその群間関係の周年変化¹⁾

○ 福田喜八郎(東邦大・理)

房総丘陵のニホンザル調査は、48年度も高宕山、元清澄の両地区を集中的に行なった。

高宕山地区の調査は、昭和48年3月27日と昭和49年2、3月に3回にわたって行なわれたT-I群の大量捕獲(天然記念物の不法な侵害)のため、T-I群の保護を焦点に行なわれた。調査はT-I群の頭数の変動、その遊動を軸に、隣接群の遊動、また高宕山地区から西方の野生群の分布について行なわれ、T-Ia群については、ほぼ全数を数え、群れ構成をはっきりさせた。

元清澄山地区での調査は、隣接する複数群の同時追跡調査を主軸に行なわれ、特に11月・2月期の遊動を明らかにすることができた。

¹⁾ これらの研究者は共同して研究を行ない、一つの報告書にまとめた。

ニホンザル野生群の食餌植物、昆虫食、土食の研究は継続中であるが、食餌植物のリストは200種を越し、現在食餌植物の食される部位と植物季節および植物の分布との関連について、解析を始めている。

高宕山、元清澄山両地区を通して、フンの採集がほぼ周年的に行なわれ、分析が始まった。この分析は近々に終了する予定である²⁾。

ニホンザル志賀B₂群の遊動生活

▽ 好広 真一(京大・理)

志賀高原横湯川流域に生息する志賀B₂群を初冬期におけるニホンザルの環境利用を調べる目的で、1973年11月30日より12月15日まで連続追跡した。この冬は降雪が早く、積雪量が多く、積雪日数も長くて、ニホンザルの冬ごしの条件は例年より厳しかったと思われる。この群れは、これまで確認された限りでは、標高800~1,700mを利用している。利用地域を、支流の合流点を境にして上流と下流に分けると、この調査期には、下流域を利用していた。餌付け群のいる餌場(標高850m)よりさらに下流を利用することも見られた。これは、厳冬期における地域利用のしかたと異っている。この時期は、降雪が

²⁾ なお高宕山地区の調査報告、フン分析の途中経過、ならびに1973年までの食餌植物のリストなどは「昭和48年度、天然記念物高宕山のサル生息地総合調査報告書」(千葉県教育委員会、昭和49年6月10日発行)に収録。

あると、上流・下流とも地面は雪で覆われる。しかし、2, 3日晴天が続くと、下流では地面の露出するところができる。このように上流と下流の差が著しく現われる時期であったことと関連した遊動なのかもしれない。

この時期の食物は、①ツルウメモドキ、キハダ、ヌルデなど、遅く熟した果実②木の芽③ササの葉④湿地や川辺に残った草木⑤サルノコシカケ科のキノコ類⑥樹皮であった。②, ③, ⑤, ⑥は厳冬期にも利用されている食物である。⑥はこの調査期間中に食われはじめた。しかし、全食物中に占める割合も厳冬期よりずっと少なかった。④の湿地利用は、初春にもみられ、積雪期に雪のないところを利用するしかたの一つである。

野生ニホンザルの食性と適応：分布要素としてみた植物性食物の種組成の検討

○ 上原 重男 (京大・理)

野生ニホンザルの植物性食物に関しては、これまで進められてきた日本各地における調査によって多くの資料が集積されてきた。ニホンザルが食物として利用したことが確認された種は非常に多数にのぼるが、その中で利用度の高い樹種の分布型には、九州本土以北のニホンザル分布域全体に共通した一定の傾向が認められる。すなわち、彼らが食物としてとくによく利用する樹種は、暖温帯～冷温帯に分布の中心をもち、少なくとも朝鮮半島南部か九州のどちらか一方に分布するという共通のパターンをもっている。

屋久島はニホンザルの分布の南限となっているが、この地域においてはまだ本格的な調査が行なわれていない。昭和48年度に行なった筆者らの調査では、この島におけるヤクザルの分布は、亜熱帯要素の強い海岸低地から、標高1,800m以上の山頂部近くまで達していること(岩野・福田, 私信)が明らかになった。現在までのところ、集められた資料はまだ不十分であるが、九州本土以北のニホンザルの植物性食物の種組成にみられる傾向が、ヤクザルにおいても同様に認められるように思われる¹⁾。

1970年以降調査を続けている房総丘陵においては、東部の元清澄山地区と西部の高宕山地区とのあいだに、主として人為的攪乱の違いによる植生の差異が認められている。これまでの調査で、この植生の違いが阿地区のニホンザルの食性にも影響を与えていることが明らかとなっている。現在この点を明確にするための資料の収集と

分析を継続している。

湯河原における野生ニホンザルの群間関係—T群出身個体の離脱と加入

○ 福田 史夫 (マカク研究会)

前年度の報告では、'64～'69年の6年間の出生オス個体の離脱率と他群への加入数を報告した。

本題のような調査は、わずか1・2年の期間で多くのデータが得られるものでもないが、73年度中に得られたデータを報告する²⁾。

1973年にT群から離脱したオスは5頭であった。このうち1頭が離脱後6カ月目でP群へ加入し、他の4頭は不明となった。また、73年以前にT群を離脱後不明となっていたオス個体3頭が他群で確認された。P群へ2頭加入し、1頭はS群であった。このS群の個体数は19頭('74年3月)であるが、オトナオスの4頭全てがT群出身個体となった。また、T群離脱後S群へ加入したオスが再び離脱し行先不明となった。オトナメスの離脱は1頭であった。(死亡したとは考えられない。)

以上のことから、少なくとも、湯河原に生息する野生ニホンザルの群れは、離脱個体を通して各群れ間の交流があることがわかった。

ニホンザル個体群の動態に影響を及ぼす環境要因の解析

✓ 木村 光伸 (京大・農)³⁾

幸島に生息するニホンザル自然群を対象に、主として個体追跡による行動様式・地域利用パターン・日周活動リズム等の把握・定量化を試み、ニホンザル個体群の生活維持に影響を及ぼす環境要因の解析を行なうべく調査を行なった。また、環境構造の異なる地域として白山蛇谷一門を選び、カムリA群の観察を併せて行なった。共同利用研究費による調査は1973年5月、9～10月、1974年1月に延70日にわたって幸島で行なった。

1973年に入ってから以降、幸島の群れでは多数の個体の死亡、行方不明、あるいは群れ全体の体力の衰え等が目立ち、当面の対策として給餌の強化が行なわれ、群れに対する人為的操作が加えられた結果、しばしば正常な遊動が阻害された。従って、日周活動の測定・定量化には多大の困難を伴ない、得られた資料の整理・分析上支障を生ずる結果となった。

調査資料は現在なお整理中であり、調査も継続されているので、現時点においては、ニホンザルが土地、特に

¹⁾ なお以上については下記の論文にまとめた。上原重男「食性からみた野生ニホンザルの適応に関する生物地理学的研究」、加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫編『今西錦司博士古稀記念論文集Ⅱ』中央公論社、印刷中。

²⁾ 73年6月以前の報告の詳細は「オスの生活史—ニホンザル地域個体群の研究Ⅰ」(和田・東・杉山編, 1974)を参照。

³⁾ 現在、日本モンキーセンター研修員。